

## 第 102 話〈三池炭鉱〉の要約と参考資料

### 第 102 話〈三池炭鉱〉の要約

三池炭鉱の採用前健診で佐藤巖さんは「ヒ素中毒」と診断されました。巖さんを三池に連れて行った佐藤十市郎さんは、土呂久に戻ると、和合会の幹部、村会議員になって亜ヒ焼き反対をつづけました。後年、入院していた十市郎さんを突然、小学校教師が訪ねてきます。

### 第 102 話〈三池炭鉱〉の参考資料

102-1 川原宏一「流れ坑夫の望郷」(「鉱脈第 11 号」1976 年 2 月)より

佐藤実雄さんの話

(佐藤巖ちいうのは) 親戚になる人が亜砒をやりよったんですがな、焼き方を。じゃから、その亜砒焼きに来んかということで、やっぱ、雇われていったんじゃと思うが。その後は、こんだ大分県から来とった野村弥三郎という人が亜砒酸を精製しよったんですが、いっぺん亜砒を焼いたのをまた精製するとですよ。他の窯に入れて、そしていよいよ真白くなった亜砒酸を、こんだ梱包して出しよったんですわ。じゃから、その工場にこんどはずっと行きよったんですがね、炭鉱に行くまでは。

メモ・佐藤十市郎さんの話

巖君は私より 6 歳ぐらい年下。小学校 6 年から大正 14 年まで亜砒焼きの仕事をしてきた。大正 14 年に炭鉱に連れていったとき、健康診断で撥ねられた。亜砒を被って身体中に斑点ができていたのが原因だ。そのときは下請けの仕事をして何年か働いとったようだ。

佐藤タニさんの話

家おつてももう、あん頃は出稼ぎなかったから、その炭を焼いたり、ま、よその田植えに牛を引っぱって行ったりしてね、日役取りしとったですからね、まあ、百姓の大きいものは、そげんことせんでも自分の百姓で生活ができるけどね、こん百姓の小さいものはそげえせんで、やっぱりどこかお金取りせにやたたんもんじゃから、その炭鉱ちゅうものはほんのいつとき行っただけじゃったから。(略)

ま、なんの考えもなかったとよな、ここの死んだ親方(十市郎さん)が、行こか、ち言うから、ま、いわば募集みたいに連れて行ったとたい、4, 5 人な、それといっしょに、わいわい行ったちや。ま、なんの目的もなかった、ただ遊び行ったんもんじゃった。

佐藤ヨシノさん(巖さんの奥さん、現在山口県岩国市在住)の話(抜粋)

昭和 10 年に香春駅のすぐ下にあったこまい炭鉱の募集にかかってきた。そこに足掛け 3 年いて、昭和 12 年に田川の大きい炭鉱に入った。37 年に主人が珪肺で死ぬまでいた。

レントゲン撮って「珪肺」とわかって、5 年の命と先生が言うので、尋ねていった。先生が、亜ヒ酸鉱山で働いていたので珪肺になったんじゃないか、と聞かせてくれた。

テレビで土呂久のニュースを見て、昔わかっていたら、公害にかかったんじゃないかと話した。

私は百姓が好き。炭鉱にでていると、働かんと金がない。雨が降ろうが、雪が降ろうが、働かにゃ金がないが、百姓じゃったら時期時期に作物を作っておれば、1 日ぐらい働かななくても食べられる。炭鉱は、働かんと食べられんけね。

佐藤巖さんは明治 39 年南九州の山間の集落土呂久で生まれ育った。尋常小学校を卒業後土呂久炭鉱で働いた。大正 14 年大牟田の三池炭鉱へ行った。そのあといつ頃土呂久に戻ったか、詳細は不明である。昭和 9 年 1 月、父親の波太郎さんが亡くなる迄の数年は、土呂久で炭焼きや畑仕事の手伝いをして生活していたという。昭和 9 年 5 月奥さんのヨシノさんと結婚。そして翌年田川の炭鉱に来る。昭和 12 年三井田川炭鉱の堅坑に移り、以後ずっとそこで暮らす。昭和 31 年肋骨を折ったが治癒する。それでも胸が苦しく今度は内科医の診察を受け、レントゲン写真の結果珪肺と診断され、昭和 32 年 3 月入院、昭和 37 年 5 月 21 日病院で亡くなった。

## 102-2 馬丁

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P79~82

牛の奇病騒ぎのもちあがっておるころ、親の反対が強いために、「白石」の十市郎さんと「母屋」のタニさんが駆落ちした。部落中で心配してどこそこ心当りを捜してみるが、行方は知れん。風の便りに、2 人は大牟田の炭鉱におるらしいちゅう噂が伝わってきた。そんなころは炭鉱行きがはやりでの。百姓で食っていけん者な、筑豊とか三池へ流れていきよった。

「畑中」の竹松さんと「南」の三蔵さんが部落を代表して、結婚を認むるから土呂久へ戻っちこいと、2 人の説得に出かけた。こうして十市郎さんとタニさんは、晴れて夫婦として故郷へ帰れるごつなつた。十市郎さんが三池炭鉱を引揚ぐるとき、事務所ん人が来て耳打ちした。

「宮崎県の者は非常に働き者だ。こんど来るときは、何人か募集して連れてきてくれんか」

大正 14 年旧 3 月 10 日、惣見、南、畑中の 3 組で、それぞれ金比羅山の祭が行われた。金比羅さんは海上安全の神様じゃが、山奥の土呂久にも組ごとに金比羅山のほこらがある。今年は誰、来年は誰と、毎年四国の琴平へお参りに行っておった。そんな年の畑中組の座元は「竹の花」での。「白石」の豊三郎さんや「畑中」の竹松さんらを中心に、夜更け

まで飲み方がはずんだ。若者組の十市郎さん、十蔵さん、巖さん、実雄さんの4人は焼酎を控え目にして、途中で座をはずした。

明るく日の朝早く、この4人にタニさんと高木栄さんを加えた6人が、土呂久を旅立った。目指すは三池炭鉱。十市郎さんの募集に、ほかの者が応じたんじゃ。土呂久鉱山で働いておった実雄さんと巖さんな、炭鉱では賃金が倍になるちゅう話に乗った。亜砒焼ききを手伝っていた巖さんには、早くこげな危険な仕事から足を洗いたい、という気持が強かった。(略)

三池の炭鉱は非常に厳格でな。土呂久のような小鉱山と違って、採用前に身体検査がある。本局に連れち行かれ検査を受けたが、ここで巖さんが一人はねられた。亜砒を焼いた身体には、黒い斑点がいくつもしみついとる。医者から「おまえは亜砒酸中毒にかかっておる」と診断された。十蔵さんたちは坑夫としての採用が決まったが、巖さんは馬丁でしかとらんという。危険な地底の労働の中でも、馬丁はとりわけいやしまれた職種じゃ。

全員、宮之原坑に回された。鉄の枠組のケージに初めて乗ったときな、恐しゅうてよ。堅坑を百果もツーと下がる。身体が上さへあがるごつジーンときての。そこから左何片、右何片と横にはいって石炭を掘る。炭車のワイヤの届かん不便な所は、坑内馬が使われた。そんな坑内馬のたづなをとるのが、巖さんの仕事じゃ。安全灯で足元を照らし、馬に引かせた炭車を運ぶ。百間もの地下に馬小屋があって、陽に当ることのねえ馬は痩せて臭うしてよ。光の届かん闇の世界で、その馬は死ぬるまで石炭の運搬を続けた。長生きはでげざった。

十市郎夫婦は、社宅のひと間を借りた。独身の4人は、小芹出身の三森福太郎さんの二階に下宿した。そんな年の盆が来て、巖さんな三池炭鉱をやめた。土呂久へ戻って、木炭を焼いたり、雇われて畑仕事を手伝うたりの生活。三池でつけられた「亜砒酸中毒」の病名を、生涯背負うちいくしかねえ。

岩戸から炭鉱へ行った者の中には、持ち帰った退職金でかなりの田畑を買うた者もおる。故郷に錦を飾るのは、珍しい例でな。戻っても土地のねえ者な、炭鉱を転々とするうちに、最後は筑豊へ吸い込まれてしまう。二度と故郷の土を踏むことなく、骨を埋ずめた者も多い。圧制ヤマで殴られ、蹴られ、決死の覚悟でケツを割る。それでも亜砒鉱山の鉱毒よりかましに思えた。

### 102-3 佐藤十市郎さんの経歴

佐藤十市郎	明治33年3月20日生	昭和49年10月8日没
佐藤タニ	明治40年6月20日生	没年 ?

### 和合会の役員

昭和3年2月15日～昭和5年2月21日 評議員

昭和 8 年 5 月 25 日～昭和 11 年旧正月 23 日 幹事  
昭和 11 年旧正月 24 日～昭和 13 年 2 月 22 日 幹事  
昭和 16 年 2 月 19 日～昭和 19 年 2 月 24 日 評議員  
昭和 19 年 2 月 25 日～昭和 22 年 2 月 13 日 会長  
昭和 22 年 2 月 14 日～昭和 25 年 3 月 11 日 会長  
昭和 25 年 3 月 12 日～昭和 28 年旧正月 23 日 副会長

#### 岩戸村会議員

昭和 22 年 4 月 30 日～昭和 26 年 4 月 29 日  
昭和 26 年 3 月 30 日～昭和 30 年 4 月 23 日  
昭和 30 年 4 月 30 日～昭和 32 年 9 月 29 日  
\*昭和 31 年 9 月 30 日 岩戸村が高千穂町に合併

#### 高千穂町会議員

昭和 31 年 10 月 1 日～昭和 32 年 9 月 29 日

#### 出兵

昭和 12 年 8 月～昭和 13 年 12 月

#### 入院（高千穂町病院）

昭和 46 年 9 月 29 日～ ?

#### 佐藤元生さんの話（2021 年 2 月 22 日聴取）

一口で言えば、豪快ちゅうか。親分肌ちゅうか。めっぼう焼酎呑みよったがの。（タニさんと駆落ちした話のあと）けっこう大胆だというか、はみ出したとこあったんでしょねえ。当時にすれば体格がよかったきの。あの世代で 170 センチくらいあったちゃねえかな。太平洋戦争の前、日中戦争に行っちゃらるっちゃ。2 年近く、中国の南京。戦闘の方は、あんまりしちらんちゃねっかな。警防団に入っちゃったち言いよらしたきたい。泉福寺の非宝さんと仲がよかった。「こん戦争負くる」ち言うとは、俺と寺ん坊主だけじゃち言いよらいた。終戦後、22 年ごろの選挙で村会議員になられたつかな。

（どうして村会議員に立候補したかは）聞いてないです。辞めた経緯は聞いたけど。別な地区にやりたい人がおらしたったい。その人が、その集落の公民館をつくるとに便利のいい土地を提供する、その代わりに俺を町会議員に……。若い者がうちに、降りてくれち頼みにきたっち。あのときはもう、高千穂町になっちゃったわけじゃ。それから町会議員は土呂久からでちよらんきの。

#### 102-4 齋藤正健先生と佐藤十市郎さんの出会い

齋藤正健「土呂久鉍毒事件告発と私」（ガリ版刷り No25～No30）

（1971年10月26日土呂久公民館で岩戸小教師3人が住民13名から話を聞いたとき）

「うちのおじは福岡の鉍山保安監督局まで行って亜砒焼き続行に反対し、けんかまでやった」という話を忘れることができません。この意見が数日後に、土呂久鉍毒事件にとって欠かすことのできない貴重な資料を見つけさせるきっかけになったのです。

（10月30日に西臼杵支部教育研究集会の「公害と教育」分科会で報告。参加者10名）

4時間近くの活発な討議の結果、「問題が重大だけに、地域住民の記憶に頼るだけでなく、もっと記録を集め、全体をもっと科学的裏付けのあるものにしてほしい」ということになったのです。これは、私にとって予想もしていない厳しい結論でしたが、これによって、さらに告発に対する意欲が高まり、調査すべきことがらのはっきりわかったのです。「そうだ。私は、あまりにも事件の大きさだけに目をうばわれてきた。どこのだれが何の病気で、いつ死んだのか、何の病気にかかっているかを調べなくちゃ！ 土呂久住民との座談会での話を忘れてしまっているじゃないか。戦前に福岡鉍山保安監督局に亜砒酸製造を中止するよう訴えた生き証人がいると言われたじゃないか！」

（11月13、14日の宮崎県集會にむけて資料収集を進めているとき）

あの老人、戦前に福岡鉍山保安監督局に行き、亜砒酸製造反対を叫ばれた生き証人に注目するようになりました。話によると、この老人は、かつて岩戸村の村会議員もしたということです。私は、いろいろ想像していたらたまらなくなり、この人が入院していらっしゃるという高千穂町立病院に向けて、寒い日でしたが、夢中でバイクにまたがり家を飛び出したのでした。高千穂町立病院は、高千穂町の中心地にあり、岩戸から7キロほど離れた所なのです。胸部疾患で結核病棟にいられること、それに、この人の名前が佐藤十市郎（71歳）さんであることを教えていただいたので、すぐ見つけることができました。11月4日のことです。木造建築の冷たい部屋に、一人だけで入院していられました。彼は私に会われた時は、びっくりされたようでしたが、私が岩戸小の教師であり、土呂久鉍毒事件を告発しようとしていることを知らされると、ベッドからおり、大そう喜ばれて、鉄びんにお茶をつがれながら、自分の経験してきた苦しい闘いを一気にしゃべり始められました。（大正7、8年ごろ亜砒焼きが始まり、反射炉のときとくに煙がひどかったと話したあと）

亜砒酸製造の事業主である中島鉍山との契約は、最初は一部地主との間であったが、この当時は、土呂久和合会（今の部落公民館を小さくしたもので、一部の有力者からなり、金の貸し借りなどを含めたかなり強い組織であったそうです。明治23年創立、昭和40年頃まで存在しました）との間で行なわれ、その契約期限が昭和16年だったが、住民としては、この年で鉍山との契約を打ち切る気持ちで陳情書なども出し反対運動もおこしていたのに、中島鉍山は再契約をせまっていた。その時に福岡鉍山保安監督局から、自分を含めた4人の名をあげ、福岡に来るよう要求がきたので、土呂久としては、事情に少しでも詳しい長老を2人連れて行くことに決めて合わせて6人で行った所、福岡鉍山保安

監督局は「宮崎県からは土呂久鉦山付近には被害は全然ないと言ってきている。亜硫酸製造を続行させよ。なぜ鉦山の継続に反対するのか」と、私たちを強く非難し、亜硫酸製造を続行させよの一点張りだったから、「そんな馬鹿なこつはない。県は土呂久に一回も調査に来たことはないし、部落民と話し合ったこともないのに、どうして煙害のこつがわかるか。とにかく現地を調べればどんなに付近をあらしているか一目でわかる」と言って事実を確かめるよう主張した。その時は全く口論だった。なんとか、調査団はやってきたが、結果は知らせずじまい、そうこうするうちに契約切れとなった。